



No. 120

発行人 澁澤 茂

発行所・事務局 一般社団法人千葉県社会福祉士会

〒260-0026 千葉県千葉市中央区千葉港4番5号

千葉県社会福祉センター5階

TEL 043-238-2866

Fax 043-238-2867

<http://www.cswchiba.com/>

E-mail: office@cschwchiba.com

特集 「福祉の福袋、今年もやりました。」



制度の壁をこえ、人と人の「つながり」をつくり直す。そこには、小さな声を大切に聞き、共に歩もうとする温かなまなざしがあります。自立とは、頼れる人を増やし、社会とのつながりをつくること。分野をこえて悩みを分かち合うことで、未来を照らす力に変わります。そんな福祉の物語をここから伝えます。

《 CONTENTS 》

- 2 特集「福祉の福袋、今年もやりました。」
- 4 実践事例報告会 分科会報告
- 6 未来の社会福祉士
- 7 印旛合同地域集会
- 8 安房地域集会&まちぶらカフェ
- 9 地図にない漂流するスナックNESTY
- 10 社会福祉士のわ
- 11 認定社会福祉士
- 12 事務局からのお知らせ

介護保険外サービス
福祉に強い便利屋
グランドール



とにかく何でもやります！

☎ 080-8166-3774

<https://benriyagrandeur.com>

 総合葬祭 二葉

ご事情に合わせてお手伝いさせていただきます。葬儀費用やご遺骨のお預かりにつきましてもお気軽にご相談ください。

◆永代供養墓 3.3万円 (税込)

◆直葬 16.5万円 (税込)

24時間365日対応

0120-918-512



第二回 福祉の福袋

【多様な現場から見えた、福祉の未来を紡ぐ「つながり」の力
「ふくしの福袋」参加報告】

和洋女子大学
家政学部家政福祉学科 准教授
千葉県社会福祉士会理事
研修委員長
高木 憲司（たかぎ けんじ）



本年度の「ふくしの福袋」は、「各分野がその壁を乗り越え、いかにかみ合うか」をテーマに、多様な実践者が集い、福祉の新たな方向性を模索する場となった。昨年は分野別にまとまりを持たせた構成であったのに対し、今年はある分野横断的な構成とし、社会福

祉士会ならではの幅広い分野の方々に登壇いただいたことが特徴である。述べ百五十名程度の参加があり、会場は終始熱気に包まれた。報告では、妊娠・出産期に孤立した女性、記憶を失い地域で保護された人、特殊詐欺の「受け子」となった若者など、現代の複雑な福祉課題を象徴する多様な事例が共有された。これらはいずれも制度や領域の境界を越える支援を必要とするものであり、福祉実践の複雑性と現場の創意が浮き彫りになった。

特に議論が集中したのは、制度の「狭間」における連携の困難さである。障害福祉と介護保険という異なる哲学をもつ二制度の接点では、理念の差異が支援の継続性を妨げる要因となっている。障害福祉が「生活を支える」ことを重視するのに対し、介護保険は「再びできるようにする」ことを目的とする。この違いを乗り越えるた

め、現場では精神科訪問看護と介護支援を組み合わせるなど、実践者自身が制度間の橋を架ける努力を重ねている。一方で、複数の報告に共通していたのは、「つながり」を支援の基盤に据える視点であった。「依存症の反対はつながりである」「自立とは依存先を増やすこと」という考え方に示されるように、福祉の焦点は個の修復から関係性の再構築へと移りつつある。人と社会との関係を取り戻すことこそが、支援の本質として再確認された。

また、支援者自身の心理的負担や葛藤にも光が当てられた。制度の狭間を埋める役割を担う支援者にとって、感情のケアと専門職間の連携は欠かせない。支援者同士が悩みを共有し、負担を分かち合うことが持続的な実践を支える基盤となることが確認された。

さらに今回は、「点と線」の表紙画展示も行われ、作者であるリリー・スー画伯とこまちだたまお氏によるトークセッションが実施された。芸術と福祉をつなぐ新たな視点が示され、会に多面的な広がりをもたらした。

メッセージツリー



まとめの討論の様子
「分野を超える
私たちのこれから」

「ふくしの福袋」は、知識や技術の共有にとどまらず、分野を超えた対話と協働を促進する場として高い意義を示した。今後の課題は、この「つながり」の哲学をいかに制度や政策に根付かせるかである。人と人、現場と現場を結び取り組みの中に、福祉の未来を切り拓く力が確かに感じられた。

点と線 展覧会

今年度の福祉の福袋では、点と線の表紙、挿絵を担当されているイラストレーター松本画伯の展覧会を、こまちだ たまおさんプロデュースで開催しました。ランチタイムには、画伯の感覚、感性に迫るトークセッションを実施しました。

写真左 リリィ・スー（松本 拓馬）

社会福祉士（千葉県社会福祉士会会員）、精神保健福祉士
平成21年 我孫子市役所入庁

幼少期に画家でありデザイナーの祖父から絵を習い、気ままにゆるっとイラストを描いています。
静かな余白と物語のある作品にしています。



写真右 野村 充津子

千葉県社会福祉士会理事（総務委員会広報部会担当）
トークセッションのコーディネーターを担当しました

写真中央 こまちだ たまお

千葉県障害者芸術文化活動支援センターうみのもりセンター長
たまあーと制作工房 美術教室・こども教室 代表

美術家として

「めぐりゆく」をテーマに 美術作品制作



〈スタッフTシャツ〉 点と線 第114号/タイトル：絆の記憶

なくなったものは、なかったものではなくて、たとえ誰も覚えていなくても、確かにここにあったこと。

これまでに広報誌表紙となった松本画伯のイラストで、スタッフTシャツ、参加者ノベルティのクリアフォルダを作成しました。グッズとなったイラストの掲載号、イラストタイトルとキャプションをご紹介します

〈クリアフォルダ1〉 点と線 第116号/タイトル：沈黙の日

家族ができてから、孤独を感じる時間がほとんど無くなった。自分の部屋もないし、ひとりの時間もほとんどない。ひとりの時間が必要なひともいるけど、私はまったく苦痛を感じない。意外にも、私は家族に向いていたのかもしれない。孤独とは会えなくなった。だけど、孤独には、今でも古い友達のような懐かしさとあこがれがある。
いつかの再会をのそんでいるような。なぜ人はこんなにも孤独に惹かれるのか。



〈クリアフォルダ2〉 点と線 第119号/タイトル：ここに いるよ

身体と自我をつなぐ臍の尾、ピコナーリボンって呼んでるんだけど。それを切る聖獣がいて、これはマケリっていう。人はメソンっていう自我だけの状態になって、レーテ川を走る列車に乗る。そのホームで列車を待つ人たち。

実践事例報告会 分科会報告

令和七年十月二十五日開催の実践報告会において実施された三つの分科会のうち、千葉県社会福祉士会担当の「私のソーシャルワーク実践」における発表について報告いたします。

【あさひキッチンガーデン】認知症の人もそうでない人も地域で活動・参加できる場】

旭市中央地域包括支援センター
認知症地域支援推進員
生活支援コーディネーター
江波戸 理恵（えぼと りえ）



「あさひキッチンガーデン」は、認知症の人の社会参加・活動の場として地域への認知症啓発活動の場として令和七年四月にスタートしました。畑を耕し、苗を植え、

収穫して味わう一連の作業の中でそれぞれが役割を持ち、互いにサポートし合いながら活動しています。また、地域にも参加を呼びかけ、現在では小さなお子さんから若者、障害のある方まで、地域の方々が幅広く集う「共生型の活動」へと発展しました。「農園」を交流のツールとして、認知症の人もそうでない人も、誰もが参加できるこの場所に、ぜひ皆さんも足を運んでみませんか。

【リフレクションとビジョン】集大成に向けて】
真塾福祉・ケアマネ事務所 管理者
池田 雅弘（いけだ まさひろ）



前半は東京での三十年間のSW実践の振り返り、後半は「東京卒業、千葉入学」後の実践の展望について語る予定でした。
しかし、後半が時間切れになってしまい非常に残念でした。当日

語れなかった後半で一番伝えたかったのは、三十年間の実践知の全てを千葉に注ぎ込んで、地域を基盤としたSW活動を続けていこうという決意でした。

最後に、発表の機会を与えていただいた堀江理事を始めスタッフの方々、報告会に参加くださった方々に深く感謝申し上げます。

【刑事司法ソーシャルワーク実践】生活困窮からホームレスになり窃盗を繰り返していた六十代男性のケース】

千葉県社会福祉士会
司法福祉委員会 委員長
寺崎 丈春（てらさき たけはる）



今回の実践報告では司法福祉委員会が運営している司法福祉連携、通称「マッチング支援事業」の実践について報告しました。この事業では逮捕され起訴や公判を控えた被疑者・被告に対して弁護人から依頼を受けた社会福祉士が協働

して支援するものです。面会を重ねて社会福祉士ならではのアクセスメントをすることで、なるべく再犯することなく社会復帰できる環境を調整して更生支援計画書を作成します。報告した事例では生活困窮でホームレスになった高齢男性の窃盗事件を紹介しました。より多くの方にこのお仕事を知っていただけたら幸いです。

【ソーシャルワーク実習におけるOSCEをいれる試み】ソーシャルワークの在り方への挑戦】
埼玉福祉保育医療製菓調理専門学校 社会福祉士養成科 教員
田邊 慎悟（たなべ しんご）



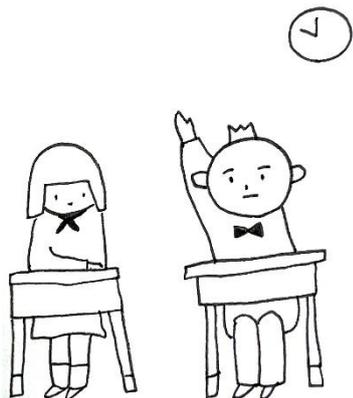
ソーシャルワーク実習は、養成校では学び難いソーシャルワーク実践の場であります。実習を通して、学生はキャリア形成やソーシャルワーカー像の発見などをしていきます。一方、見極めを曖昧に

して実習に送り出すことは福祉サービスを利用している方等へ様々な影響を及ぼすことを考慮しなければなりません。医師をはじめ、リハビリといった医療職では既に実施されているOSCE(※注)を社会福祉分野で展開できるのであれば、実習生の質の担保と標準化に繋がるのではないかと考え、実習前評価システムの施行に着手致しました。

※注 『OSCE…客観的臨床能力試験』

試験評価項目…五十名の社会福祉士にアンケート調査を行い、ルーブリック評価を作成。

試験項目…①十五分間の模擬面接、②ソーシャルワーク実習指導者への面談報告、③記録作成の三段階にて試験実施を試みている。



【今回学んだことを分野・領域は違えども、自分の「実践力」にどのように加えていきますか?】
 千葉県社会福祉士会実践事例報告会に参加させていただいて
 東京通信大学 人間福祉学部 人間福祉学科 准教授
 矢野 明宏(やの あきひろ)



千葉県社会福祉士会実践事例報告会の開催経緯や実施報告については「点と線一九九号」において、副会長 堀江亜希子氏より情報共有があったところです。この企画の実現に奔走された皆様、実践事例報告をしてくださった四名の方に改めて敬意を表し、御礼申し上げます。

さて、四名それぞれのご報告は、「特別な実践」に見えますが、その本質は、私たち社会福祉士の「基本中の基本」をととても大事に丁寧になされている実践でした。

私が特に認識したことは、『専門職が日常の住民の方々の思いを真摯に汲み取り、地域に結びつけていくこと』『情報発信(住民の皆

さんの工夫も含めて)の工夫』『本来の「参加」とは何か』『人材養成・育成においては、自分自身も共に成長していくこと』『視点と視座について』『学生が思い描くSWerのモデル等の重要性』『刑事司法領域の実践事例を誰にでもわかりやすく伝えること』『どのような方でも取りこぼさないこと』『連携・協働について、日頃の「ちよっとしたこと」から大切に行動なさっていること』などです。

どれも言葉としては皆様から「あたりまえじゃないの!」とお叱りを受けそうですが、私たちはその「あたりまえ」のことができているのでしょうか? 例えば、経験豊富な専門職は、住民の方々の思い、申し出などを自分の経験という「価値観」に影響され、スルーしてしまったり、専門職・行政などからの一方的な情報発信だけに終始していないでしょうか?

また、「経験が邪魔していないか」、「自分の物の捉え方はバイアスがかかっていることを意識できていないか」を日々再認識しようとして実践しているでしょうか?

そして、SWerの実践をより良いものにするためには、連携・協働も重要で、会議体等では連携・協働等がだいたい可視化し、効果を発揮し

ている現実も出てきました。しかし、本来大切にすべき「日頃のちよっとしたこと」を大切にしているでしょうか? それを大切にしていればこそ、有益な連携・協働ができ、SWerの心の葛藤にも貢献できるのではないのでしょうか?

私たちは、時には、『これまでの経験則だけがもたらした「価値観」が知らず知らずに形成され、支援において「視野を狭めてしまっている」かどうか』を振り返り(リフレクション)、その振り返りをもとに将来のビジョンの形作りをしていかなければならないのではと思います。これには個人だけでは限界があります。職場でも日常業務の多忙さなどから限界が生じやすくなります。

そこで、私たち千葉県社会福祉士会に集い合う仲間たちとともに成長しあうことを日常的に実践していく重要性が見えてきます(例えば、地域集会在各地で開催されていますね)。

ということで、私矢野の雑感を終えたいと思います。ありがとうございました。

くれぐれもご健康に留意され、お過ごしください。そして、皆で良い実践を積み重ねて、社会的責務を果たしてまいります。

未来の社会福祉士

「ソーシャルワーカーのキャリアパス」

日本女子大学 人間社会学部

社会福祉学科

浅野 琴音（あさの こことね）



■ソーシャルワーカーを志した原点

高校三年生の総合学習で、たまに選んだ「福祉を学ぶ講座」。その授業で視聴した「ハートネットTV」を観て、価値観が大きく揺さぶられました。

性的マイノリティの存在を知らなかったし、親から「同性愛の人は私たちとは違う」と聞かされて育ってきたので、自分も無意識に偏見を持っていました。

番組で語られる当事者の苦しみ

は、「周囲の理解のなさ」から生まれていることを知りました。同時に、自分の中の偏見に気づき、「社会はもっと変わるべきだ」と感じました。「自分が信じていた『当たり前』が、誰かを傷つけていたと知ったんです」この気づきが、福祉の道へ進む最初の一步でした。

■福祉への興味は「権利」への感覚から

大切にしているのは「優しさ」よりも「権利」という視点です。困っている人に「優しくする」というより、誰もが当たり前に尊重される社会であるべきだと思っています。

性的マイノリティ、生活保護受給者、薬物依存症者。偏見によって生きづらさを抱える人々に関心が向くのは、自分自身の中にある「違和感」が原点にあります。

■実習で見えた「貧困と医療」のリアル

三年次は更生施設、四年次は病院で実習を行いました。病院実習では、経済的相談のケースが印象に残っています。経済的に困窮している状況では、医療機関を受診することが大きな負担となり、必要な医療へつながることが難しいことを知りました。

「お金がないから医療を受けられないのはおかしい。誰もが健康を維持できるよう支援したい。」



■福祉を学ぶ仲間たちの進路

社会福祉学科の学生は約百名。そのうち社会福祉士を受験するのは三十名弱、医療ソーシャルワーカーを目指すのはわずか五名。「資格を取っても一般企業に行く人が多いです。給料の問題も大きいと思います。」

■実習での「緊張」と「学び」

実習で最も緊張したのは「見られること」でした。「患者さんとの会話も、日誌も、全部見られて評価される。どう思われているか気になってしまつて……」

大学では時間をかけてレポートを作り込むタイプ。評価は分かりやすく努力が結果で戻ってきます。でも、現場ではそうはいかないですよね……。スピードと要約力が求められるけど、できるのか不安です。

■インタビューより最後に

偏見に気づいた高校時代の一瞬から始まった福祉への道。彼女の言葉には、揺るぎない「権利」へのまなざしがある。

「一人ひとりの支援を通して、少しずつ社会を変えていきたい」これから医療ソーシャルワーカーとして歩み始める彼女の未来が、とても楽しみです。



印旛合同地域集会

『みんなで考える事例検討会』
あなたの視点はどこにある？

多世代家庭支援のリアル

報告者

千葉 広美（ちば ひろみ）

令和七年十二月二十日

会場・八街市総合保健センター

参加人数・三十四名



社会福祉法人で事務職をしている私は、ハラスメント相談窓口を担当しており、今回の研修内容に興味を持ち参加しました。

当日は、「山武がつながる劇団」のミニ動画をもとに、グループワークによる事例検討会が行われ、テーマはカスタマーハラスメントでした。「山武のつながる劇団」による事例検討会は第四弾とのことでしたが、資料にあらすじが記載されていたため、内容を理解しやすかったです。

第一話「カスタマーハラスメント」

デイサービスから帰るといじめられていると泣く認知症の母親。主人公（息子）のケアマネジャーへの言動はハラスメントになるか。ケアマネジャーの対応はどうか。

第二話「俺の生い立ちと母への愛」

主人公のこれまでのうまくいかない人生と家族のかかわりを踏まえてケアマネジャーはこの家族にどう対応していくのがよいか。

第二話の視聴後は、主人公の人生の物語に引き込まれ、一本の映画を観た後のような意味での疲労感を感じました。物語のリアルさ、演者の皆さんが体験しているからこそそのリアル。そして、あの映像が一日で撮ったと知ったときは驚き、同じグループの方からあのシーンは？ このシーンも？ など、前回の物語の伏線が回収されたとの声もありました。

カスタマーハラスメントに発展させないためには、初期段階での適切な対応が必要だと学びました。ハラスメントになるのか、ならぬいのかの境界線は、相手との関係性が大切です。

日々、対象者や家族とどのように関わっていくか、そういう姿勢が問われています。

うまくいかない人生を送ってきた主人公に対して、信頼関係を構築していかないと相手にとって良い支援はできないと感じました。

特に多世代多問題家族は、多職種との連携も必要です。支援者側として、ストーリーに乗る利用者

は良い利用者、ストーリーに乗らない利用者は支援困難、困難ケースになってしまいうそうです。そうならないためには、その人の価値観を尊重しながら伴走していくことが大切です。

主人公は常に相談者自身であることを忘れずにいたいと思います。



安房地域集會 & まちぶらカフェ

NPO法人タナギ
高梨 裕史（たかなし ひろし）



安房地域では、コロナ禍の影響で社会福祉士会としての活動が思うように進まない状況が続いたため、安房地域でまちぶらカフェを開催したいと思いました。同時に、地域で精神障害者支援に取り組む私の職場について、より多くの方に知って頂き、理解を深めてもらいたいと思い、九か月に渡り、開催に向けて企画を進めました。事前見学の日には、NPO法人タナギが運営する地域活動支援センター茶の間トミー（以下、茶の間トミー）の近くにある駅前デ

いのりの家）の宮本施設長（以下、宮本様）と出会い、地域の社会資源をより深く知る機会として、障害と介護の垣根を越えた「ソーシャルワーカーまちぶらカフェ in 館山」が誕生しました。

久しぶりに開催される安房地域集會と同時開催となり、準備にも一層力が入りました。当日は四街道や柏など遠方からも参加者が集まり、館山駅から二グループに分かれて茶の間トミーとみのりの家を見学。有形文化財に登録されているみのりの家では、歴史ある建物やこれまでの取り組みを紹介していただき、茶の間トミーでは精神障害者の居場所づくりや相談支援に力を入れている様子を紹介しました。

見学後は北条海岸にある喫茶店SEADAYSで夕日を眺めながら名刺交換や意見交換を行い、和やかに交流を深めました。安房地域集會では、安房地域らしい温かな交流が生まれ、まちぶらカフェだけ参加予定だった方も加わり、社会福祉士への想いや今後の活動を語り合う場となりました。ここで、みのりの家の宮本様からのメッセージを紹介します。

「まちぶらカフェは、施設見学だけではなく町並みを歩きながら地域の社会資源を知ることができ、貴重な企画であり、これまでの事業を振り返る良い機会にもなりました。また、普段交流のない方と繋がることのできた点も良かったと思います。今後のまちぶらカフェが、地域を知る有意義な取り組みとして、より多くの方に広く周知されることを願っています」

最後に、私が社会福祉士を志したきっかけは、医療相談員として勤務していた頃、多様な困りごとに向き合う中で、より深い学びが必要だと感じたからです。また地元との繋がりも広がる中で、資格取得後は生まれ育った安房地域に恩返しをしたい。自身の精神面の経験からも、精神障害者支援に力を注ぎたいという思いが芽生えま

した。三度の挑戦を経て社会福祉士となり、現在はNPO法人タナギで働いています。NPO法人タナギには、関わる人々、またこの地域に必要なと思うことを形にしていこう、そういう思いがあります。その想いを胸に、私も共に歩みます。精神障害

者支援の取り組みは他の社会福祉士の皆様と交流し、理解を深める貴重な機会となりました。まちぶらカフェや安房地域集會にご協力下さった皆様、見学を受け入れて下さった施設の皆様、そして企画に参加して下さった皆様に心より感謝申し上げます。



地図にない 漂流するスナック NESTY

メインママ
二瓶 陽子（にへい ようこ）
ラコルタ柏（教育福祉会館）コワー
イネーター、他



柏駅近くのアフリカンレストラ
ンに四人が集まったある夜、話の
勢いでスナックをやることに。こ
れが「スナック NESTY」の誕生で
した。NESTYは「nest（鳥の巣）」
に由来し、「非日常の空間で、あな
たの『巣』作りを」がコンセプト。
四人のチーム名は「nomadoodle
（ノマドウドル）」に決定しまし
た。nomad（遊牧民）× doodle（ら
くがき）から生まれた、自由と対

話を旅するソーシャルワーカーな
ママたちです。

柏を漂流しながら開催している
スナック NESTY、第三回の会場
は「特別養護老人ホーム柏きらり
の風」。施設長をはじめ、強力なゲ
ストママ&マスターとのコラボで、
特別な夜を迎えました。第一部は
施設の利用者さんを交え、第二部
には地域の方などさまざまな人が
集い、肩書や年齢などを取り払っ
て、ただ今夜の仲間として語り、
笑い、カラオケも熱唱。

スナック NESTY、次はあなた
の街にお邪魔しようかしら。「サー
ドプレイス」や「アウトリーチ」
という言葉にピンときた方は、陽
子ママにお声がけくださいね。
※二〇二三年七月に発行された
『点と線』百十二号「ストレート
ネックマンの部屋」で、「スナック
とかやりたい」と答えていた私。
まさに「思うは招く」です。



■スナックのお客さんより一言
中核地域生活支援センター

ほっとねっと

岡本 竜一（おかもと りゅういち）

一回目はアフリカンレストラン
バー「MOTINDI」、二回目は「わ
とか食堂」、そして今回は「特別養
護老人ホーム柏きらりの風」で開
催され、私はこれまで全てに参加
しています。

今回、特に驚いたのは、介護施設
でお酒を酌み交わし、カラオケで
盛り上がるという光景でした。参
加者の皆さんは、まさにスナック
にきたかのように、その場と空気
を心から楽しんでいました。介護
施設でこのような試みを実現する
のは難しいと考えていましたが、
施設長が率先して動き、セクシー
なゲストママや、市民バーテンダ
ーも登場。施設の概念を超え、障
害・高齢・年齢などの垣根がない一
体感を感じました。

まさに、地域・高齢者・障害福祉
が「点と線」で結ばれ、柏市西原地
域の包括的な地域資源となってい
ると実感しました。相談員同士が

集まるだけでなく、福祉職以外の
地域住民が交わることで、福祉以
外の視点に触れ、新たな発想を得
られる貴重な機会になっています。
先日、包括的な支援体制づくり
を考える研修会のグループワーク
で、ある参加者から『もやもや』
と『わくわく』の掛け算で支援を行
うと面白い」というお話がありま
した。スナック NESTY は、まさ
にこの掛け算によって、柏地域に
新しい面白さを創出していました。



スナック nesty のインス
タグラムもご覧ください

社会福祉士の

わ

福井 真一（ふくい しんいち）



普段はメーカーで人材育成の仕事をしており、研修の企画から運営まで何でもこなす、いわば「教育現場の便利屋」を約二十年続けています。

そんな私が社会福祉士として活動している理由は意外とシンプルです。「教育もやりたい、福祉もやりたい」と感じたからです。

私の母はALS（筋萎縮性側索硬化症）を患い、十二年間の闘病の末に亡くなりました。

数年間は母と同居し、仕事と介護を両立する生活を送っていましたが、今振り返っても、「よく倒れなかったな」と思うほどのギリギリの毎日でした。

その母を支えてくれたのが、多くの福祉関係者の皆さんです。医療・介護・行政がチームとなり、考えうる限りのサポートをしていただきました。

このときに感じた感謝の気持ちが、私を福祉の世界に引っ張り込んだ原動力です。私と同じように「民間で働きながら、福祉とも関わりたい」と思っている方は、きっと少なくないはずです。

本業で家計を安定させつつ、副業で自己実現をし、その結果として福祉現場が少し元気になる。そんな働き方を「普通の選択肢」に

することが、自分の役割だと考えています。

さて、話はガラッと変わります。皆さん、生成AI（以下、AI）やDX（デジタルトランスフォーメーション）をどのくらい使っていますか？ 私はどうかと、めっちゃ使っています。

本業の教育現場では、AIやDXはもはや「あると便利」ではなく「ないと話む」存在です。会社全体もAI抜きでは業務が回らない状態なので、使いこなすというより「使わざるを得ない」というのが正直なところなんです。世の中では、今後30〜60%の仕事がAIに置き換わると言われています。

教育現場も例外ではなく、AIによる研修支援、バーチャル講師の実装、企画書に至っては、私が一晩かけて作るものより、AIが数秒で出すものの方が、出来が良いこともあります。正直、ちょっと寂しい。でも、変化に適應できる人が生き残るフェーズに入ったのは間違いないですね。

では、我々「成年後見人」の仕事はどうなるのでしょうか。後見業務を始めて、まもなく一年。この間、AIやDXをどう組み込め

ば、業務の質を上げ、効率化できるかを考えてきました。申請書類の添削、法制度の情報収集、関係者メールの要約とタスク化など、すでに効果が出ている業務もあります。一方で、肝となる「身上監護」の部分に関しては、AIやDXでは代替できない仕事が多いと感じています。試しにChatGPT

にも聞いてみたところ、「事務作業や情報整理、申請書作成補助は一部代替可能。ただし、本質的な部分の代替は難しい」とのことでした。技術の進歩は凄まじいので、「代替されにくいから安心」と油断するのではなく、AIやDXを「パートナー」として使いこなす姿勢が、これからの後見業務には必要だと感じています。

※今回、AIに関する簡単なアンケート（所要時間三分）を作成しました。

匿名で回答できますので、欄外のQRコードからご協力ください。また、すでにAIやDXに取り組んでいる方がいらっしやいましたら、ぜひ情報交換しましょう。「福祉×テクノロジー」、一緒に面白くしていけたら嬉しいです。



認定社会福祉士

医療法人社団嵐川 大野中央病院
患者支援室
藤田 理恵子（ふじた りえこ）



令和七年四月一日付けで地域社会・多文化分野の認定社会福祉士となりました。

私は現在病院の医療福祉相談員として相談支援業務に従事していません。病院の医療福祉相談員が「医療」ではなく「地域社会・多文化分野」の専門分野を選択した理由と、認定社会福祉士取得までの経過をお話したいと思います。

私の勤務している病院は、二次救急と回復期リハビリテーション病棟、地域包括ケア病棟をもつ在宅療養支援病院で、その他に地域包括支援センターや訪問看護ステーション、通所リハビリテーション、居宅介護支援事業所も併設しています。

入院している方の大半は高齢者で、再び地域に復帰するために医療や介護などの療養環境調整が必要となる方が多数います。そのため、生活の再開にあたり患者さんや家族、そして支援者の役割を考えながら「地域で暮らすことの大切さ」を被支援者と同じ目線で見ることが必要不可欠です。

こうした経緯から、自分の幅を

広げていきたいと基礎研修の受講を決めました。研修が始まると社会福祉士の専門性や役割について、様々な分野で活躍している社会福祉士の実像に多角的な視点で触れることができました。

私自身、ジェネラリストソーシャルワーカーの不足している視点にも気づき、様々な支援課題が明確化されるとともに、認定社会福祉士の資格取得についても意欲が高まったと思います。

科目取得に時間がかかり気持ちが悪落ち込むなかで、自分に再度向き合い指導者のスーパービジョンを受けることが、モチベーションの維持につながりました。

スーパービジョンの学びはとても大きく、場面の瞬間を深く見て考える視点を養うことは思った以上の難しさもありましたが、スーパービジョンを受けたことで病院を訪れる様々な疾患を持った患者さんとその家族に対する自分の支援が、実際にどのアプローチでどのような援助展開がなされているのか等、その根拠や理論に日々模索していた今までとは異なる状況

が見え始めてきました。

その後、相談支援業務にも変化が現れたように思います。医療チームの意見を基本に、その患者さんや家族の意思決定について周囲に理解を求めることの大切さを訴えることが自然と実践の一部となり、多職種連携の強化や調整の具現化へつながりました。

地域生活の再開をする支援の過程には、関係機関との調整で時に苦勞もあり支援者の考え方に戸惑うこともありましたが、認定社会福祉士になってからは、多角的な視点を取り入れたことで、よりケースを総体的に把握し社会資源や地域コミュニティを活用するなど、自分自身の支援展開にも変化が生じてきたと感じています。

私が「地域社会・多文化分野」を学んだことで、地域で生活することの大切さを主にケースを展開し生活再開が果たされれば、それは患者さんの利益にもつながると思います。

今後も支援に「地域社会・多文化」を意識し業務に従事していきたいと思えます。

事務局からのお知らせ

重要

今回号をもちまして



冊子（紙）での配布は終了します

かねてよりお知らせをさせていただいた通り、社会環境への意識の高まりやペーパーレス化の推進の流れを受け、当会でも発送物等の見直しをしております。その一環として

2026年度分の  より、冊子（紙）での配布を終了いたします。

※なお、千葉県社会福祉士会のホームページへの掲載は従来通り継続いたします。



2026年度からは・・・

「会員専用ページ」よりご覧いただけます
(現在もご覧いただけます)

2026年度以降も冊子（紙）での配布をご希望される場合は、発行手数料として1,000円／年を申し受けます。

詳細は、今回同封させていただきました「点と線 冊子配布を希望される方へ」をご覧ください。

一般社団法人 千葉県社会福祉士会

新マスコットキャラクターを募集します。



詳細は「千葉県社会福祉士会のホームページ」
に掲載予定！

会員数：1755名（2025年12月31日現在）

一般社団法人 千葉県社会福祉士会 事務局

〒260-0026 千葉県千葉市中央区千葉港 4-5

千葉県社会福祉センター5階

TEL043-238-2866/FAX043-238-2867

メール：office@cschwchiba.com